

# 研究

## 萬葉集の歌に於ける「者」字について

日野雅恵

### 目次

#### 参考文献

#### 序

#### 本論

##### 第一章 萬葉集に於ける「者」字の用法

###### 第一節 助詞を表わす用法

###### 第二節 漢文の不説助字としての用法

###### 第三節 人及び生命あるものを表わす用法

###### 第四節 字音仮名としての用法

###### 第五節 まとめ

##### 第二章 萬葉集と古事記・日本書紀・風土記との比較

###### 第一節 古事記・日本書紀・風土記の歌に於ける「者」字について

###### 第二節 萬葉集と古事記・日本書紀・風土記との比較

###### 第三節 字音仮名用法について

#### 結論

#### 注

#### 付

古典を読む場合、最も注意しなければならないのは、現代人の感覚で古典の言葉をとらえたり、詩人的直感でもって鑑賞しようとする誤りをおかしがちなことであろう。

萬葉集を本当に味わうには、萬葉時代の人人の生活の中に入っていくことが必要なのである。そして、萬葉人と共通な言語感覚で読む必要がある。そうでない限り、萬葉集の正しい鑑賞が出来るわけはなく、また、現在では何にも感ぜずに使っている語句の内に、古代人の深い心が潜んでいるのに気付くことは出来まい。

しかし、私達が普段何気なく使っていて、その意味するところを疑いもしないであろう「父」「母」といった類の語にしても、果して、当時、現代の私達と同じような言語感覚で用いられていたのか、いかなる意味を持っていたのか、明らかではない。

このような観点から、萬葉集をはじめ、他の上代諸文献に関しても、用字法の研究が進められている。その中で、私は、萬葉集に於

ける「者」字の用法を考察してみた。その際同じ上代文献である古事記・日本書紀・風土記に於ける「者」字の用法との比較研究という方法をとった。

しかし、萬葉集は主として韻文であり（題詞、左注は散文とす）、他文献は主として散文である。韻文と散文とは、自づから、これらに対する意識が異なるので、その表記法も当然異なってくるであろう。そこで、これらの諸文献を、歌と散文とに分け、萬葉集は歌が中心であるので、このうち、歌について考察することにした。

## 本論

### 第一章

萬葉集の歌に於ける「者」字の用法は、四つに分類することができ。以下、順を追って述べていく。

#### 第一節

第一の用法は、助詞を表わす用法である。

- (イ) 吾者・妹念（二・一三三三）
- (ロ) 見者・悲毛（一・三三三）
- (ハ) 心者・忘日無（四・六四七）
- (ニ) は「ハ」、(ロ)は「バ」、(イ)は「ニハ」と訓まれている。(イ)は複合助詞を表わすもので他に、妹者不<sup>レ</sup>喚（三・二八六）相見者（四・六五四）神毛吾者（十一・二二六六一）の例もある。注意すべきは、「者」自身を「ハ」「バ」「ニハ」と訓むのかどうか、つまり、「者」が音表記として使用されているかどうかは定かでないこ

とである。ただ、「者」があれば、助詞として「ハ」「バ」「ニハ」と訓まれるので、助詞を表わす用法という表現をしているのである。

しかし、明かに「ハ」と訓んだ例として、者田為々寸（一六・三八〇〇）

の例があり、また、鶴久先生が『萬葉集に於ける「者」字の用法』（萬葉第二十一号）の中で述べておられるように、

平安時代、草仮名が発生するや「者」の草体を平がなの「は」として頻繁に使用したことから、「者」の訓は、次第に、「ハ」に固定していったと考えられる。

ところで、(イ)(ロ)に対し

吾為鴨（十一・二七一四）

月見（十一・二四二〇）

心千遍雖念（十一・二三七二）

の如く、「者」を表記しない例が見られる。このような省略が行われるのは、省略しても当代人には理解できたと思われる場合であること、福田良輔氏が述べておられる。

そこで、各巻について、助詞ハ・バ複合助詞ニハ・トハ・テハ・ヲバ表記における「者」字の使用頻度と省略頻度とを調べてみる

と、第一表の如くである。

「者」使用は、頻度の多い巻少い巻に、二大別できるが、いづれも「ハ」を表わすのに多く用いられている。省略も「ハ」を表わす場合に多い。助詞ハは主格となる語につく場合が多く、「者」が無くても当代人には理解されやすかったと思われる。また、省略例は、半数以上が巻十一に集中している。巻十一には、人麿歌集所出

第一表

卷	「著」字表記				表記省略						
	ラバ全用例数	用例数	%	ハ 用例数	バ 用例数	助複 詞合 用例数	ハ 用例数	バ 用例数	助複 詞合 用例数		
一	七二	五二	七二・二	三〇	一九	三	一	一・四	一	〇	〇
二	一八八	一六五	八七・八	七七	八二	六	三	一・六	三	〇	〇
三	二二二	一八六	八三・八	一〇三	七一	二	〇	/	〇	〇	〇
四	二五一	二二〇	八三・七	一一一	九二	七	三	一・二	三	〇	〇
五	一二九	一〇	七・七	九	〇	一	〇	/	〇	〇	〇
六	一八五	一七二	九三・〇	九〇	七三	九	二	一・一	二	〇	〇
七	二〇二	一六五	八一・八	八三	七六	六	二	一一・九	一八	〇	〇
八	一七〇	一四八	八七・一	七七	六六	五	一	〇・六	一	〇	〇
九	一五六	一二八	八二・一	六八	五六	四	四	二・六	三	〇	〇
十	三三六	三〇八	八四・二	一七二	一三〇	六	二七	七・四	一九	七	一
十一	三四二	二〇八	六〇・八	一一六	七八	一四	一一〇	三三・二	六九	三二	一〇
十二	二六三	二三二	八八・二	一三四	八八	一〇	一八	六・八	一五	一	二
十三	二二二	一八六	八七・七	一〇二	七八	六	七	三・三	七	〇	〇
十四	一三七	三	二・二	三	〇	〇	〇	/	〇	〇	〇

十五	一五六	一二	七・七	一二	〇	〇	〇	〇	〇
十六	八五	五八	六八・二	三一	二七	〇	六	七・一	〇
十七	一六八	一〇	六・〇	四	六	〇	〇	〇	〇
十八	一〇一	八	七・九	三	五	〇	二	二・〇	〇
十九	一三六	六五	四七・八	二九	三四	〇	〇	〇	〇
二十	一七二	二	一・二	二	〇	〇	〇	〇	〇
合計	三七一三	一三三八	六二・七	二五六	九八一	九一	二〇八	五・六	一四八
									四六
									一四

歌が一六二首もあり「人麿歌集にはテニヲハを省略した簡単な表記が見られる」ことから、この人麿の表記法の影響を受けていると思われる。

## 第二節

第二の用法は、漢文の不説助字としての用法である。これは、更に三つに分することが出来る。

(イ) 比者(三・二三六、四・六三〇以下略)

(ロ) 今夜乃長者(六・九八五)

(ハ) 中々者(四・六一二) (家持歌)

(イ)は、漢文に於ける「者」の用法にそのまま従ったもので、「者」が時を指している場合である。「者」は不説で、「コノコロ」「コロ」と訓む。他に、頃者(四・七二三以下略) 廻者(十・一九八四) 今者(三・三三二以下略) 昔者(三・三三二以下略) の例がある。

(ロ)は、「者」を音仮名に用いた例がないことから「稔」「矣」「也」と同じ不説助字と解するものである。上の語と二字で「ナガサ」と訓んでいる。他に、苦者(六・一〇〇七) 逆者(八・一五五〇) 樂者(九・一七五三) 吉者(十・二三三三) 貴者(十九・四二六六) の例がある。

(ハ)は、「中々」の二字で「ナカナカニ」と訓み、「者」は不説の助字とされている。

## 第三節

第三の用法は、「人及び生命あるもの」を表わす用法で、「者」字そのものを、「ヒト」「モノ」と訓む用法である。

(イ) 生者 遂毛死 物尔有者 (三・三四九)

(ロ) 生者 死云事尔 不レ免 物尔之有者(七・四六〇)

(ハ) 或者之 痛情無跡 将レ念(一〇・一三〇一)

(ニ) 見者 白水郎可將レ見 釣不レ為尔(七・二二〇四)

(イ)の訓については、「イケルモノ」「イケルヒト」の二説があるが、何れも、生者必滅の意に解している。注釋に「およそ生ある者といふ意でイケルモノの語が用いられたと考ふる事極めて自然であらう。」とするのに従い、「イケルモノ」と訓むべきであらう。

ところが、古典大系本に「者」の字はヒトと訓むのが古訓点の常例で、モノとは読まない(中田氏)』と注している。集中、字音仮名による「ヒト」表記は多数存在しているが、「モノ」表記は見当らない。<sup>(注3)</sup>しかし、日本書紀歌謡に「瀾致<sup>(注3)</sup>噓<sup>(注3)</sup>區茂能茂(日本書紀・卷第十一、三九八頁)」とあり、人の意に用いられていることは明らかである。故に、人の意としての「モノ」という語もあつたと考えられ、(イ)の「者」を「モノ」と訓んで抵觸はない。

(ウ)は「アルヒトノ」、(エ)は「ミルヒトハ」と訓むのに従つた。この用法に於ては、「者」字単独では用いられていない。何れも「生者」の如く連体修飾語を伴い、句頭の「ヒト」は「人」字を使っている。これは、漢文に於ける形式名詞の用法に従つたものと思われる。

#### 第四節

第四の用法は、字音仮名としての用法である。この用法例は、集中、一例のみである。

者田為々寸(一六・三八〇〇)

この語は「波太須珠寸(八・一六三七)」「波太須酒伎(一四・三五〇六、々・三五六五)」「波太須酒吉(一七・三九五七)」とも表記されており、「者」を「ハ」と訓むことが明らかである。

#### 第五節

萬葉集に於ては、以上のような用法がみられる。そこで、「者」字の全用例に対する各用法例の比率をみると、第二表のようになる。

九八・二%が第一の用法であり、「者」はもっぱら助詞を表わすのに使われたと思われる。

次に多いのが、第二の用法で、この用法は巻により、使用されている巻と使用されていない巻がある。漢文に於ける不説助字の用法

第二表

卷	「者」字		第一用法		第二用法		第三用法		第四用法	
	用例数	用例数	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
一	三	三	100	0	0	0	0	0	0	0
二	一五	一五	100	0	0	0	0	0	0	0
三	一三	一六	六九	0	四	三・一	二	一・〇	〇	〇
四	三五	三〇	七三	0	五	三・八	〇	〇	〇	〇
五	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	一七	一七	六九	〇	二	一・一	〇	〇	〇	〇
七	一六	一五	六三	〇	二	一・三	一	〇・六	〇	〇
八	一五	一四	六〇	〇	三	二・〇	〇	〇	〇	〇
九	二	二	九三	〇	一	〇・八	〇	〇	〇	〇

十	三六	六六	七五	七	二二	一	〇三	〇
十一	三三	六六	九一	四	一九	〇	〇	〇
十二	二六	三三	七五	六	三五	〇	〇	〇
十三	一六	一六	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
十四	〇	〇	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
十五	三	三	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
十六	空	六	九六	三	四八	〇	一	一六
十七	一〇	一〇	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
十八	八	八	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
十九	空	空	六五	一	一五	〇	〇	〇
二十	二	二	一〇	〇	〇	〇	〇	〇
合計	三三	三三	三六	九二	六	一六	四	〇二
								一〇〇四

であることから、漢文の素養のある人によって使用されたと考えられる。編纂者、筆録者の用字意識を探る一助となろう。

第三の用法は、わずかに四例であり、「モノ」訓は二例のみである。「モノ」の字音表記がないことから、人を表わすのには「ヒト」の語を使うのが普通で、「モノ」の語はあまり用いられなかったと思われる。上代に於て「モノ」は神・鬼神に対して使われており、敬意・畏怖の観念を伴っていたと思われる。故に、人の意として用いることが少なかつたのであろうと考えるのである。しかし、現代に於て、「者」は人を表わすのが普通である。しかも敬意的観

念が含まれていないのは、敬意漸減の法則によるものと思われる。第一の用法及び第四の用法についての考察は、第二章と関連しているので、第二章に述べる。

## 第二章

第一章で、萬葉集の歌における「者」の用法について、分類、考察してみた。ここでは、それを、古事記・日本書紀・風土記の歌に於ける「者」の用法と比較し、考察する。

### 第一節

古事記・日本書紀・風土記の「者」についてみると、明らかに歌謡と認められるものには、古事記・風土記にそれぞれ一首ずつあるのを除いては、全く使用されていない。ここで、「明らかに歌謡と認められるもの」と限定したのは、歌謡と認めるか否かで問題のあるものが存在するからである。そして、それらには「者」が使用されているのである。

そこで、これらの問題となるものを次にあげる。

#### (1) 此時歌曰、

宇陀能 多加紀爾 志藝和那波留 和賀麻都夜 志藝波佐夜良受

(中略) 舞麻留 志夜胡志夜 此者伊能非布會 此夜字 以レ音 阿阿留

志夜胡志夜 此者嘲笑者也。(古事記二五六頁)

#### (2) 為レ詠曰、

物部之、我夫子之、取佩、於三大力之手上、丹畫著、其緒者、

被二赤幡一、立赤幡、見者五十隳(下略) (古事記三三四頁)

#### (3) 為三室壽二曰、

築立稚室葛根 築立柱者。此家長御心鎮也 取擧棟梁者。此家長

御心之林也(下略) (日本書紀上・五二三頁)

(二)誥之曰、

倭者。彼彼茅原 淺茅原 弟日 僕是也 (〃〃〃)

(三)神祖尊 歡然誥曰

愛乎我胤 巍哉神宮(中略) 遊業不窮者。(常陸國風土記四〇頁)

(四)唱曰

住吉之 大倉向而 飛者許會 速鳥云目 何速鳥

(播磨國風土記四八四頁)

(1)は、明らかに歌謡と認められるものに「者」が使用されている例である。しかし、この用例は、歌謡の部分ではなく、上の「志夜胡志夜」を説明したものでないかと思われる。本来ならば小文字で書かれるべき注であろう。

(2)を歌謡とするか否かについては、諸説があつて、定説はない。

そこで、用字法の面からみると、古事記、日本書紀、風土記に見える他の歌謡すべてが一字一音式仮名表記であり、「者」使用の例が全くない。また、歌謡表記として(2)は「詠」を用いている。しかし、第三表の如く、古事記に於て他の歌謡にはすべて「歌」が使用されている。内容については、顕宗天皇の名宣りの場面であり、祝詞・宣命的色彩が強い。よつて、一般の歌謡とは異質のものであり、同列にはおき難い。以上、(1)一字一音式表記ではない(2)「者」を使用している(3)「歌」表記ではない(4)名宣りの部分である、ことから(2)を歌謡とは認め難い。

第三表 歌謡表記

	歌	詠	號	唱	和	誥歌	曰	歌謡数
古事記	一一二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一一三
日本書紀	九七	九	三	二	二	一	一一二	二二八
風土記	一一二	〇	〇	四	〇	〇	〇	二〇

(注) 歌謡数は古代歌謡集(日本古典文学大系土橋寛校注)の分類による。

(1)(2)についても(2)と同じ理由で歌謡とは認め難い。

(3)は、明らかに歌ではあるが、一字一音式表記ではなく、「者」を使用している。ところで、この歌は風土記の逸文にみえるものである。逸文の性格上、筆録者や筆録時期などすべて不明である。風土記に於ける他の歌謡がすべて一字一音式表記であり、「者」使用が無いことから、この歌をそれらと同様に扱うことは出来ない。よつて、(3)も、この章で扱う風土記歌謡には入れないことにする。以上、「者」字使用の問題のあるものについて考察してきた。結論としては、何れも歌謡とは認め難いものである。つまり、古事記・日本書紀・風土記の歌謡には、「者」字使用は一例もないのである。

### 第二節

萬葉集の歌に於ける「者」字使用の頻度を表に示すと第四表のようになる。

第四表

卷	歌数	「者」一字 使用歌数	「者」一字 使用頻度%	字音表 記歌数	割合
一	八四	三三	三八・一	〇	/
二	一五〇	八四	五六	〇	/
三	二四九	一四〇	五五・八	〇	/
四	三〇九	一六七	五四・〇	〇	/
五	一一四	四	三・五	八五	七四・六
六	一六一	九六	五九・六	〇	/
七	三五〇	一四一	四〇・三	〇	/
八	二四六	一二一	四九・二	〇	/
九	一四八	七一	四八・〇	〇	/
十	五三九	二七二	五〇・五	〇	/
十一	四九〇	一七八	三六・三	〇	/
十二	三八〇	一八六	四七・四	〇	/
十三	一二七	八六	六七・七	〇	/
十四	一三〇	三	一・三	二二〇	九一・五
十五	二〇八	一一	五・三	一三七	六五・九
十六	一〇四	四一	三九・四	〇	/

十七	一四二	九	六・三	六六	四六・五
十八	一〇七	四	三・七	七七	七二・〇
十九	一五四	四九	三一・八	五	三・三
二十	二三四	一	〇・四	一七六	七八・六
合計	四五一六	二六九六	三五・三		

総歌数四五二六首に対して、「者」使用の歌は一六九六首で三五・三％にあたる。古事記・日本書紀・風土記の歌謡に一例も無いことを考えると大変な相異である。また、使用頻度の多い巻として(甲)巻一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九、極めて少ない巻として(乙)巻五・十四・十五・十七・十八・二十、に分けられる。古事記・日本書紀・風土記の歌謡は、すべて一字一音式表記である。そこで両群の仮名表記を調べてみると、(乙)群はどの巻も一字一音式表記が圧倒的に多い。第四表下段は、一首全体が一字一音式表記のものである。

これらのことから、一字一音の表記法には「者」を殆ど使用しなかつたと考えられる。少くとも、古事記・日本書紀・風土記の頃までは、一字一音式表記に「者」は使用されなかつたと言える。

しかし、萬葉集には、「者」を一字一音式表記に使用している例が一例ある。第一章でのべた「者田為々寸(一六・三八〇〇)」の例である。だが、上代に於ける字音仮名としては、第五表(略)に見る如く「波」「姿」が広く用いられていた。

### 第三節

「波」「姿」に対し「者」が字音仮名として殆ど用いられていないのは、前者は漢字音として「ハ」「バ」音を有し、後者は有していないのに基くものと思われる。即ち、「者」を「ハ」と訓むには、最初漢文の用法にそのまま従って用いていたのを、助詞「ハ」を表わすものとして用いるようになり、遂に「ハ」音を表わす字音仮名として用いるに至ったと考えられる。「者」が「ハ」と訓まれるに至るには、長い歴史が必要であった。古事記・日本書紀・風土記の字音表記に「者」が使用されていないのは「ハ」音を表わす段階にまで至っていないかと思われ。萬葉集に一例みえるのは、ようやく「ハ」音を表わすものとして意識され始めたものと思われる。しかし一例のみであり、殆どが助詞を表わす用法に使用されているのを考えると、(2)の段階から(3)の段階へ移行する先がけとなったものであろう。とにかく、「波」「姿」の如く、広く用いられるまでには、まだ至っていないのであろう。

#### 結 論

以上のように、萬葉集の歌における「者」について用法を分類し、また、古事記・日本書紀・風土記の歌謡と比較し考察してみた。

萬葉集の歌に於ける「者」字には

- (1) 助詞を表わす用法
- (2) 漢文の不説助字としての用法
- (3) 人及び生命あるものを表わす形式名詞としての用法
- (4) 字音仮名としての用法

の四つの用法がある。(1)(2)(3)の用法は、漢文に於ける用法に源を発し、(4)の用法のみが我國独自の「者」の用い方と言える。

字音仮名用法は、萬葉集に一例あるだけで、それ以前の文献にはみられない。「者」は、漢文に於ける「者」の用法↓助詞を表わす用法↓字音仮名の用法、の経緯を辿ったものと思われる。故に、「者」が字音仮名として使用されているのは、使用されていないのに比して時代が新しいといえよう。

萬葉集に於ては、助詞を表わす用法に最も多く用いられており、字音仮名の例が一例みられる。そして、平安時代には「者」の草体が平かなの「は」として使用されるに至る。このことから、萬葉期は「者」使用に於ての過渡期にあったと言えよう。

(注1) 書紀に見えてゐる「之」字について(台北帝國文政学部 文学科研究年報第一輯)熊本女子大学卒論『35古事記における「者」字の用法について』大岩隆子『35日本書紀に於ける「者」字について』梅田トミ子に引用されているのを参照した。

(注2) 日本古典文学大系萬葉集三の解説参照

(注3) しかし、一般性のある事例として言うときに用いる形式名詞「奈良麻之母能乎(五・八六四)」の類は多数みられる。

参考文献(底本として使用したものだけあげておく。他は略す)

- 1、萬葉集本文篇(佐竹・木下・小島共著瑞書房)
- 2、日本古典文学大系 古事記祝詞(岩波書店)
- 3、" " 日本書紀上下( " )
- 4、" " 風土記( " )